

愛する者たちよ！（その1）

[マルコによる福音書 2 章 13～17 節]

イエスは、再び湖のほとりに出て行かれた。群衆が皆そばに集まって来たので、イエスは教えられた。そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがレビの家で食事の席に着いておられたときのことである。多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである。ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

[1] 神さまからのラブコール

マルコによる福音書 2 章 17 節のイエス様の言葉、「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。これは、神さまからの私たちへのラブコールです。

マルコ福音書は、主イエス様が公のお働きを始められたその第一声を、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」であったと記しています。先週ご一緒に見た所です。「神の国」と言われます。その「神の国」の住人とはどういう人なのか。私たちが普通に思うことは「私は胸を張ってそこに行ける、私こそそこに相応しい人間だ」などとは思えず、むしろ、神の国と聞くと不安になる、自分は相応しくないと思い、嬉しい言葉とは聞けないのではないかと、思ってしまう。けれどもです、イエス様は、「神の国」に私たちを招くためにやって来られました。その「神の国」への「招き」がこの言葉なのだと思います。—「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

嬉しい言葉ではないでしょうか。これを嬉しい言葉として聞けたとき、もう私たちの中に「神の国」は始まっていると思います。「医者が必要とするのは、丈夫な人ではなく病人」、その通りです。私たちは、病気になると、薬に頼るか、お医者さんの所に行きます。まあ強がってこのままじっとしていれば病気は消

えると思う人もあるかも知れませんが、それは軽い病気の場合ですね。大きな病になったり、手術を伴うような場合、私が自分で治す！ ということはあり得ないですよ。その病を抱えたままの自分でお医者さんの所に公に行くのです。当然のことです。生き続けるためにです。ところが魂の問題、心の深みの問題については、私たちは中々公にしないと云いますか、隠れたままでいたいと思ってしまうのです。或いは、解決など出来ない、と諦めてしまっているということがあるのかもしれませんが。そこで、主イエス様の私たちへの招きのお言葉はこうです。—「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

[2] 「神の国」の地上における雛型

神の国の住人たちはいわゆる良い人、正しい人たちで出来ているかと思っただら、そうではないと。わたし（イエス）が来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである、とおっしゃいます。これはある意味イエス様の「宣言」ともいえる強い言葉です。世の中には有名無実、基準がはっきりしない宣言が沢山ありますけれども、これはイエス様のアイデンティティー、**ご自分の存在、命を賭けた大きな宣言**と言えらると思います。

このイエス様の宣言は、**レビ**という取税人（マタイのこと）にイエス様が声をかけ、その言葉に立ち上がって従って行ったという出来事に端を発しています。2:14以下。「そして通りがかりに、アルファイの子レビが収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った」。—そしてその後、レビの家では大勢の者たちに食事が振舞われているのですね。「多くの徴税人や罪人もイエスや弟子たちと同席していた。実に大勢の人がいて、イエスに従っていたのである」とありますように「**主を中心とした食卓**」がここには生まれています。今日はこの後「**主の晩餐式**」も行いますが、正に「**主の食卓**」、「**神の国**」の地上における雛型がここにはありますね。それは、招くお方（神の国の真の王様）がいて、その招きに、シンプルに、素直に応答する者たちがいて成り立つ共同体です。ここには「**教会**」の本質があります。

特に私が慰められるのは、このレビについて、彼が誰からも尊敬されるとか家柄が良いとかそのような描写は一切なく、それどころか彼は「**通りがかりに**」見出して頂いただけの徴税人である、ということです。この当時ユダヤの徴税人というのは、同国人からは腹の中では軽蔑されていました。ローマ支配の犬、ポチのようになって見せかけの権力で金を吸い上げる。あの**ザアカイ**の話（ルカ 19章）にもありますが、彼らは権力は持っていても友はなく、孤独であり、自分の生き方はもうこれしかないのだ、と「**自分**」という部屋の中に閉じ籠っていた人ではなか

ったでしょうか。その「通りがかりに」座っているだけのこの人を、イエス様は「神の国」に招いたのです。そしてレビはその招きに応えました。彼の家で食事が開かれている。16節以下にこうありました。ファリサイ派の律法学者は、イエスが罪人や徴税人と一緒に食事をされるのを見て、弟子たちに、「どうして彼は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「わたしが来たのは正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである」。

「罪人」という言葉ですが、これはある意味、レッテルではないでしょうか。普通この言葉を私たちは普通の生活の中ではあまり使いません。でも聖書の中に出てくるので教会の中でこそよく使いますが、一般に「罪人」というのは「前科者」という意味合いが強いと思います。「前科者」というのはどのような人かと言えば、**罪人と称される「前科＝過去」を持つ人**です。この世の中、前科者が生き直す、その後も普通に生きていくというのは決して簡単なことではありませんよね。どうしても過去を引きずってしまうことがあります。

今度『前科者』という映画が公開されるそうですけれども、その過去を持った人がこの世界の中で新しく生きて行く、それを助ける「保護司」という人がキーパーソンとして描かれているようです。保護司は、無償のボランティアとして月二回その人と面会したりしながら、その人の再生のために寄り添っていくのです。そういうのを知って私は思いました。「あ、イエス様は、過去に捕らわれている、いや、そのことにさえ気付いていないで、自分は孤独なのだとおぼく私たちに本当に、どこまでも誰よりも寄り添って下さるお方なのだな」と思いました。強引に引っ張るのではない、私たちが本当に生き生きと生きることが出来るように、**共に生きて下さる**のです。あなたは「罪人・前科者」などというレッテルが貼られた人間ではない、「**わたしの愛する者**」だ！と私たちに寄り添って下さる。いえ、それどころか、あなたが生きるために私は犠牲になっても良い！と十字架にかかって下さったのです。それを証しているのが、聖書なのです。

[3] 「祈る」心が与えられている

聖書が告げる人間とは、素晴らしい存在なのです。イエス様は「空の鳥を見なさい、野の花を見なさい」と言われました。今日の招きの聖句（マタイ 10:29 以下）も素晴らしい言葉ですね。「**二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。**」雀一羽すら神様が目を留めて下さっていると主は言われます。有難いと思います。けれど錯覚してはいけないと思います。人間ほど弱い生き物はいないと思います。動物としては鳥のような翼

はないし、魚のようにえら呼吸も出来ない、裸になれば毛皮もないのですぐに死んでしまう存在です。また、内側、心の中は一体どうなのでしょう。去皮剥けば汚れたものでいっぱいです。でも「**あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにま**
さっている」とおっしゃって下さる。まさっていることとは？イエス様は「罪人を招くために来た」とおっしゃいました。神様は私たちと一緒に**交わりたい**のです。私たちはもともと**神様と交わることが出来る存在**として創造されているのです！
「交わり」と言っても、変なスピリチュアルなことではなく、神様・イエス様の愛にお応えして行くということです。礼拝を捧げるといふこと、神様を讃えるといふ姿勢こそがそうだとと言えますし、時に**神様の前に涙し、悔い改める**といふことも人間だけに与えられた素晴らしい恵みではないでしょうか。私たちはいつでも原点に立ち戻れるのです。あの旧約聖書の**王ダビデ**も、神様の前の**悔い改めを知っている**がゆえに、初代のサウル王以上に優れた王だと言われます。神様は、私たちの心に「**祈る**」心を与えて下さいました。これこそ神様の愛です。その祈り・神様との交わりの中で、またみ言葉を聞く中で、既に私たちが神様に丸ごと受け入れられ、赦されていることを知る事が出来るのではないのでしょうか。

私たちのこの交わりの中心にはいつも主がおられます。ですから、私たちもいつもこの主のもとに立ち帰って行きたいと思えます。「教会」とは生き物です。同じ礼拝は一つもありません。今日も新しく皆さまお一人ひとりに、主イエス様が語りかけて下さっているのです。「**神に愛されている者よ、わたしに従ってきなさい**」と。

お祈り致します。

主よ、今日の礼拝を感謝致します。あなたは私たちに「愛する者よ」と呼びかけ、あなたが真の王としていて下さる神の国に招いていて下さいます。私たちは皆、道端で拾って頂いたような存在、しかし、その私たちのためにあなたは愛を貫いて下さいますから感謝致します。どうかあなたのご愛の中に共に生かされていくことが出来ますように導いて下さい。私たちのこの交わりの中心にいつもあなたがいて下さいますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。